

## 巻頭言

中部労災病院

江口 雅之

### 実感することの大切さ

春の風や陽射しの強さに季節の移り変わりを感じるようになりました。先日、当院の桜をふと見ると、ちらほら咲き始めていることに気づきました。毎年この季節は、年度の替わり目でもあり筆者の場合、多忙を理由に、その年度を振り返り反省することもなく、新しい春を迎えようとしています。改めて考えると、日々の生活では、気づかないまま過ごしていることの多さに驚きます。毎日の通勤路で目にしている建物や店舗などは、変わったことに気づいたとしても、以前は何があったか思い出せない。そんな経験はよくあると思います。目的を持って行動しているときは、その過程にある情報が目的に関係するか否かで処理されます。つまり、必要と認めない情報は消去され記憶に残りません。日常で目にしているものが、ほとんど記憶されていないことに気づかされます。仕事のうえでも日々、患者と向き合い評価します。時にこの評価は誰のための評価か疑問に感じる場合があります。評価結果は個人情報であり患者のものであります。しかし、その情報を管理しているのは現場のPTであり、施設です。それをもとに我々は、運動プログラムを選択し到達目標を定めます。臨床での多忙を理由に、評価結果や理学療法プログラムの意味を、患者自身に理解してもらうまで説明できていないことが多いのではないのでしょうか、ややもすると評価は自分の仕事を円滑に遂行するための課程であり、患者自身に十分つたえることができないままに、理学療法の介入が始められる。このようなケースを少なからず筆者は経験し反省しています。患者に評価結果を伝えることで身体機能の現状と到達目標を理解してもらうことは重要です。人は多くの場合、日々の身体の変化に気づきません。継続的にリハを行っている患者の場合では、身体機能がどう改善したか気づかないことが多いと思います。何か動作が出来なくなったことは気になりますが、改善した場合は気にならないからです。スタートの状態を患者自身に十分に理解してもらうことは、毎日の動作練習や理学療法の効果を、患者自身に実感してもらうことやモチベーションの向上につながると考えます。入院してリハビリを受けたことと退院時の状態は記憶に残っても、リハの効果を患者自身に実感できなければ、理学療法の効果や専門性を一般的に認識してもらえないようになるには、まだ時間が必要だと感じます。

近年、理学療法をとりまく環境は、大きく変化を遂げたと思います。大学をはじめとする教育機関の整備が進み学術活動も活発になりました。しかし、臨床の現場においては、理学療法を受けた人が自身の身体についてどれだけ変化を実感できたかということが、PTの社会的評価につながると考えます。日々の業務では、すべての患者に十分な時間がとれないことがあり、リハの経過説明も一方的なものになりがちです。患者自身が運動の効果を、感じることもできたか確かめることなく評価結果から「理学療法の介入効果があった」と自分を納得させているPTは、筆者だけではないと思います。何気なく歩いている道は、日常の慣れた業務と似ていると思います。多くの担当患者を時間毎に診ながら一日が過ぎます。時には患者と向き合うだけでなく、同じ様にゴールを向いて患者がリハ開始時から歩んだ道のりを、実感しているかということを確認、ともに共感できることが大切だと思います。

理学療法は科学的根拠に基づくものであることを示す一方で、臨床現場の実践が伴わないと社会的認知は高めることができないと思います。患者とともに実感できる理学療法を心がけ自己研鑽に励みたいと思います。